

第 1643 回 (5 月 30 日)

中山間地における家族・集落構造と 老人介護福祉

相 川 良 彦
(武蔵大学) 叶 堂 隆 三
(日本女子大学) 岡 本 緒 里

若年層流出と高齢化のすすむ中山間地＝長野県北御牧村の切久保集落の実態調査を通じて、高齢者の医療介護システムと従来の農村社会関係との対立や連関を明らかにした。

第 1 に、当集落には、「くるわ」と呼ばれる同族団など、男系を核とした親族組織の存在すること、役場や農協の下部組織としての「家」を単位としたフォーマルな諸組織と、個人の付き合いや趣味のためのインフォーマルな組織とが累積して存在すること、過疎化(若年層の流出と残された人々の高齢化)が進む中でも、上記のような社会関係や組織は、部分的変更をとげつつも現代に再生されていること、などが明らかにされた。

第 2 に、当集落の家族を次のように捉えた。過疎化により、高齢化が極度に進み、老人 1 人暮らしや老人夫婦形態の多いという家族構成をとっている。また、兼業化の進行は家族家計の分化・分割を促し、家計の一体化を損ないつつある。だが、意思決定面では、世帯主が主となりその他家族員に相談しながら決定する、男性優位の合議プロセス(→家族の一体性)が強く残されている。ただ、農作業を除く家事や社会的付き合い等、一般について性別分業に基礎をおく役割分担が明確に守られ、1 人で遂行されることが多いことを指摘した。

第 3 に、高齢者の介護福祉についての農村住民のニーズと、ボランティアとしてサービス提供に協力する人々の社会的条件を検討した。

まず、老人の介護福祉は、これまで家族の義務とみなされたために、公的介護福祉サー

ビスに対する偏見があり、在宅介護福祉諸サービスに対するニーズの大きさにもかかわらず、利用者はさほど多くない実態を提示した。その背後には、介護福祉へのボランティアとしての協力や、公的サービスによる供給自体が、都会から持ち込まれた新しい思想の産物と、地元住民に受け止められていることを例示した。具体的には、ボランティア・リーダーは、人生の一過程を都会で過ごした高学歴者の多いこと、ヒューマンイズムにもとづく純粋なボランティア精神に啓発され、この活動に参加しはじめたこと、ただ、ボランティア精神にもとづく活動の無償性が、ボランティア活動から青壮年層を遠ざけ、ボランティア参加者自体の高齢化に結果してきていること、ボランティア参加者は、社会的活動に積極的な人々であること、等が確認されたのである。

第 4 に、他方で、介護福祉は地元の人々に、農村的論理で受け止められ、従来からある社会関係を介して広がった側面もある。ボランティア・リーダーが老人介護問題への取り組み参加を呼びかけた時、説明に使ったのは「お互い様」の論理であり、個別的にオルグした場としては、農協婦人部の集まりや趣味の会、そして親戚どおしが連れ立って参加している割合が高かったのである。

なお、老人介護問題へ取り組む前史として、婦人達による 20 年におよぶ社会運動の蓄積があったことは忘れてならない。もともと住民の地域健康診断としてスタートしたのだが、食品の安全→有機農業→特産物形成による村づくりへと展開し、そこで蓄積されたノウハウや人的ネットワークが当該老人介護施設開設へつながったところに、当該運動の成功の一条件があった、と見られるのである。